

特集「看護現場における応用心理学的諸問題」

機関誌編集委員会第4部門（健康・スポーツ・看護・医療）部門責任者
川本利恵子（日本看護協会）

日本応用心理学会機関誌「応用心理学研究」第39巻1号に『特集：看護現場における応用心理学的諸問題』が発刊されることになりました。長く応用心理学会に携わる者として、今回の看護特集号の企画をしてみたいました。このように無事に特集号にたどりつきましたのは、私と同じく編集責任者として、ご尽力いただいた森田敏子先生と松下由美子先生、深澤伸幸機関誌編集委員長をはじめとする編集委員会の先生方および応用心理学会の藤田理事長や理事の先生方のご理解とご協力のお陰だと心より感謝申し上げます。

特集号の企画の趣旨は、看護学分野における応用心理学研究のさらなる発展を目指すため、また広く心理学分野と関連の深い研究を紹介する、あるいは発表の機会を提供することにあります。そこで、応用心理学と密接に関連した看護学分野での研究に注目するため、患者心理、安全、連携、キャリア発達をキーワードに広く投稿を求めました。今回の特集号に掲載されている論文は、企画の趣旨に賛同いただき、積極的に投稿をいただいた成果によるものです。その結果、原著論文4編、資料論文4編、実践報告1編、短報3編の合計12論文という充実した看護特集号になりました。

私がなぜこのような応用心理学機関誌の編集号の構想を抱いたかといえば、私が、心理学と看護学の学際性を目指していたからです。思い起こせば30年前、大学院生（心理学専攻）として日本応用心理学会に入会しました。その当時は、看護学分野に関する研究の発表は皆無でした。

大学院終了後は、看護教育の道に進みましたが応用心理学会学術大会では必ず研究発表を行っていましたが、学術大会で偶然発表者として同席したのが、故人となられた千葉大学名誉教授の内海滉先生でした。この頃は、まだ看護教育は短期大学が開設されていた時代でしたが、その後看護学の学問体系が構築され、大学教育へと大きく変革が始まりました。看護学の高等教育化は学問としての看護学の確立がより一層必要となり、看護研究の推進が求めら

れるようになりました。この頃、内海滉先生は千葉大学看護実践研究センター教授で医学が専門でしたが、隣接学問領域である看護学分野の教員を支援されていました。看護教員の学会発表の場として、多くの看護教員に応用心理学会の入会を勧められ、応用心理学会のなかで看護領域確立に貢献されました。しかし、その当時は研究発表内容はまだまだ稚拙であり、不安を抱かれる学会員もありました。日本応用心理学会での看護研究発表数は増えても、学術性が高い『応用心理学研究』へ論文投稿までには至らない状況でした。そのような期間が長く続き、応用心理学会ではここ数年は、看護の学会が増加したことと内海先生がお亡くなりになったことも影響してか、学会での発表件数も減少し、徐々に看護系の学会員数も減少しました。

そこで、1998年からは日本応用心理学会の理事になりました。2009年には第76回日本応用心理学の大会長を務めさせていただき、応用心理をキーワードに医療に関するテーマで学術大会を運営いたしました。この学術大会で看護学研究の学術的レベルは向上しつつあることを感じました。日本応用心理学会は、看護学分野の学際的な研究を発展させていく学会として最もふさわしいと考えておりましたので、機関誌編集委員会委員をお引き受けし、編集委員長も務めました。

近年、日本応用心理学会の看護学研究は向上し、充実してきました。そこで、さらなる看護学研究の向上と発展のための起爆剤として、巻頭言を書いていただきました森田先生、松下先生とともに今回の看護特集号の企画をさせていただきました。このように日本応用心理学会第80回記念大会と同時期に刊行される「看護特集号」を企画させていただきましたが、看護学研究の発展に寄与できる機会をいただき心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、改めて「看護特集号」発行を快くご快諾いただいた藤田理事長ならびに編集委員長、日本応用心理学会の諸先輩方や会員の皆様にご心より感謝申し上げます。（かわもと りえこ）

『応用心理学研究—看護特集号』の発刊を祝して

森田 敏子 (熊本大学大学院生命科学研究部)

2013年7月に『応用心理学研究—看護特集号』が発刊されることは、看護教育者の一人としてたいへん嬉しく思います。その構想を提案され慎重に検討され、英断された理事長ならびに編集委員長、関係者の皆様にあらためて敬意を表します。

1980年代ごろから看護学教育制度改革が推進され、看護学教育の高等教育化をめざした大学教育の潮流が始まっていました。私は看護専門学校で教員として看護研究をする必要性を感じながらも、教授活動と学生の生活指導を第一義的に行っておりました。1992年4月に、国立大学医療技術短期大学の助教授(現、准教授)になると、研究する必然性に直面しました。そのとき、相談させていただいたのが、故人となられた千葉大学名誉教授の内海滉先生です。私が看護専門学校の教員をしていたとき、千葉大学看護実践研究センターの教授でしたが、「統計学」の非常勤講師として来校された折り、「看護教員は常に勉強と研究をしなさい」と語っておられました。

当時、国立系看護教員の資質向上を目的に1年間の研究員制度があることを教えてくださり、「この制度を利用して研究しなさい」と助言いただきました。その翌年から、正式に千葉大学看護実践研究センターの共同研究員として定期的に通い研究指導を受けることになりました。そのとき研究テーマがあったわけではありません。「何を研究したら良いか」というレベルの相談でしたので、今思えば無謀でした。しかし、内海滉先生は、「良く来たね。“何を研究しようか”考えることは楽しいことだよ!」と温かく受けとめてくださり、「看護教員だから、看護学生の研究が良いだろう」と研究テーマを示唆してくださいました。この一言が、研究テーマ「看護学生の達成動機に関する研究」になりました。研究を開始して、データを収集し、結果を整理して考察する段階になると、「学会で発表しなさい。日本応用心理学会が良いね。さっそく学会の入会手続きをしよう」と励ましてくださいました。私が日本応用心理学会に入会したのは、1996年5月1日です。

日本応用心理学会で初めて研究発表したのは1996年の第63回大会(大会長:神作博先生,中京大学)ではなかったかと思えます。それ以来毎年、日本応用心理学会で研究発表してきました。2000年8月には日本応用心理学会認定「応用心理士」(第157号)の資格を得ました。しかし、日本応用心理学会で研究発表を重ねても、機関紙『応用心理学研究』への論文投稿となると難易度が高く困難性があり、躊躇せざるを得ません。いつか、機関誌『応用心理学研究』へ論文投稿しようと思いつきながら時間が過ぎていきました。

そのような状況にいた2009年、第76回の日本応用心理学の大会長を九州大学の川本利恵子先生が引き受けられ、企画委員にさせていただきました。大会企画ワークショップ「実践教育(臨地実習)における学生への心理的サポート」を運営・展開し、活発な討議ができたことは勇気づけられる体験となりました。第76回の研究発表は、「看護」「産業・職業・交通」「社会・文化」「認知・感情・人格」「検査・測定」「介護・福祉」「矯正・非行・犯罪」「発達・教育」「臨床・相談」「原理」というように応用心理学をキーワードに多岐にわたっています。まさに、看護現場における応用心理学的諸問題といえるものです。

2012年からは、日本応用心理学会の看護部門の研究の充実を図りたいという川本利恵子先生の強い意志から、理事として機関誌編集委員会の委員をお引き受けし、微力ながら看護部門責任者を支援する役割を果たしております。日本応用心理学会は、看護学という専門分野の理論的研究と看護実践活動の融合によって看護学を発展させていく学会として最適でないかと思えます。

日本応用心理学会の発展に努めてこられた先輩たちに感謝し、2013年9月に日本応用心理学会第80回記念大会という節目を迎える年に発刊される「看護特集号」が看護学の発展に寄与できることを祈念してやみません。

(もりた としこ)

松下由美子（山梨県立大学看護学部・大学院看護学研究科）

日本応用心理学会に入会したきっかけは、千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センターの共同研究員として、内海滉先生から研究指導を受けたことでした。1990年に「自我同一性地位テストの検討—看護学生を対象とする因子分析によって」という演題で口頭発表したのが本学会との最初の出会いでした。当時は多くの看護職者が会員となり、活発な論文投稿も行われていました。これは、内海先生のお力添えが大きかったことだと思います。時代は大きく変わり、看護系大学の数が200校を超えた今日、看護学研究者は数を増しているのですが、応用

心理学会の認知度は高くはありません。そのような折りに、本学会誌に「特集：看護現場における応用心理学的諸問題」が発行される運びとなりました。これは川本利恵子先生の永年に渡る努力の賜であると、心底より考えています。本誌の発行を期に、人を対象とした営みである看護にかかわる研究者達に本学会の存在を広く知ってもらいたいと願っています。看護学自体は幼い学問ですので、魅力的な学問へと育てて行く土壌として本学会を活用して行く所存です。今後とも諸先生方のご指導をお願いいたします。

（まつした ゆみこ）